

教科体育組織におけるコミュニケーションの方略と 機制

著者	?岡 敦史
内容記述	筑波大学博士（体育科学）学位論文・平成23年3月 25日授与（乙第2539号） 付：文献一覧
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/2241/114422

氏 名（本籍）	たか おか あつ し 高 岡 敦 史（岡 山 県）
学 位 の 種 類	博 士（体育科学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2539 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	教科体育組織におけるコミュニケーションの方略と機制

主	査	筑波大学教授	博士（文学）	佐 藤 臣 彦
副	査	筑波大学教授		清 水 紀 宏
副	査	筑波大学教授		岡 出 美 則
副	査	筑波大学准教授	博士（教育学）	佐 藤 博 志

論 文 の 内 容 の 要 旨

(1) 研究の目的と方法

本論文は、体育授業の教師間差異の縮減と自律的改善という今日的な体育経営上の課題に着目し、教科体育組織において知識の共通性と更新性を高める教師間コミュニケーションについて、教師が意図的・戦略的に行っているコミュニケーションの方法（＝コミュニケーション方略）とそうしたコミュニケーションに内在している仕組み（＝コミュニケーション機制）を明らかにすることを目的としている。こうした研究課題に対し、前者のコミュニケーション方略については、全国の中学校・高等学校における教科体育担当の体育主任に対する質問紙調査を行い、知識の共通性・更新性状況やコミュニケーション属性との間の影響関係等を検証するという方法を採用している。後者のコミュニケーション機制については、コミュニケーションを通して知識の共通性を確保している事例校（千葉県 Y 市、K 小学校）に対するフィールドワークを通して、そこで展開されている知識伝達に着目し、共通性が確保されるに至るメカニズムを検討している。こうした定量的研究と定性的研究双方から得られた結果を総合的に考察することで研究課題に対する知見を得ようとしている。

(2) 論文構成と概要

本論文は全 6 章から構成され、各章の概要は以下のようになっている。まず、第 1 章では、「問題・目的・方法」と題され、①問題、②目的、③方法、④概念定義と用語使用規則といった序論的課題が検討され、「（教科にかかわる）知識がやり取りされ、その結果として知識の教師間差異が縮減されたり、改善される有効な教師間コミュニケーションのプロセスとメカニズムに着目する」としている。第 2 章：「先行研究」では、①本章の目的と位置づけ、において全体的な意図について述べられ、以下、②体育経営組織研究の潮流と到達点、③教育経営学における研究潮流と到達点、④自己組織化に関する研究潮流と到達点、⑤組織コミュニケーション研究の潮流と到達点、⑥組織開発論の研究潮流と到達点、⑦サービス・マネジメント研究の潮流と到達点、それぞれにおける先行研究を検討したうえで、「教師間コミュニケーションへのアプローチは、教師の実践的知識の暗黙知性を踏まえ、知識がメッセージとして話し手から聞き手へと受け渡されると捉えようとするものではなく、コミュニケーションを通して、各教師が保有する知識の意味の共通部分が增大す

ると捉えるアプローチを採用する」としている。第3章：教師間コミュニケーションの方略（①目的と課題、②方法、③結果、④考察、⑤小結）では、教師が意図的・戦略的に行っているコミュニケーションの方法を明らかにするため、全国の中学校・高等学校における教科体育担当の体育主任に対する質問紙調査という定量的方法を援用し（有効回収標本数：703、回収率：35.03%）、知識の共通性・更新性状況やコミュニケーション属性との間の影響関係等を検証している。その結果、①共同化、②表出化、③連結化、④外部情報連結という4つのコミュニケーション方略が知識の共通性・更新性を高めることが明らかになったとし、さらに、教師集団内のコンフリクトへの対応やパワーの源泉がコミュニケーションの展開と関係性を有していること、特に競技力の高さと研修経験の豊富さに由来するパワーが教師間コンフリクトへのポジティブな対応と結びつくときにコミュニケーション方略の展開が促進されることが明らかになった、としている。第4章：教師間コミュニケーションの機制（①目的、②方法、③知識共通性向上の様相、④知識伝達の機制、⑤考察、⑥小結）では、コミュニケーションを通して知識の共通性を確保している事例校（千葉県Y市、K小学校）に対するフィールドワークを通して、そこで展開されている知識伝達に着目し、共通性が確保されるに至るメカニズムを明らかにしようとする定性的研究法が援用されている。その結果、知識の共通性が確保されている体育組織においては、リーダーの個人的意見表明と他教師の発話を明確化したり同意したりする発話が知識伝達の機能を有していることが示唆され、そこでの知識伝達は、他教師の体育授業に関する考え方や授業実践を一定方向に誘導する意図を含む発話が担っていた、としている。第5章：考察（①有効な教師間コミュニケーションの生起に関する考察、②体育組織とコミュニケーションに関する考察、③教科体育をめぐる知識経営に関する新たな知見の収集）では、定量的研究（第3章）の結果と定性的研究（第4章）の結果を関連付けながら包括的考察がなされ、第6章：結論（①本論文の要約、②体育授業の教師間差異の縮減と自律的改善の方策、③本研究の実践的含意、④今後の研究課題と展望）において、体育組織における協同的な授業づくりの方策等について実践的示唆を得ることができた、としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、体育授業の教師間差異の縮減と自律的改善という今日的な体育経営上の課題に着目し、教科体育組織において知識の共通性と更新性を高める教師間コミュニケーションの方略と機制を検討したものである。前者の「コミュニケーション方略」については全国規模でのアンケート調査という定量的方法を、後者の「コミュニケーション機制」については、先進的な体育実践が評価されている事例校での長期にわたるフィールドワークという定性的方法を援用することで、課題に対する多元的アプローチを試みている。審査委員会では、実証された事柄と演繹的推論による事柄との厳密な区別についての若干の指摘がなされたが、全体としては、従来、経験的に知られていたことに実証性を与えつつ、データの厳密な分析によって新たな知見が提示されており、学位論文として十分水準に達していると評価された。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。